

【源泉交游】

図書館行政の暴挙・と・行政当局の独裁化

43億1千万円もの多額の図書館整備予算を予定しながら、一方で既存の東図書館を廃止するのは全く理不尽な“暴挙”である。しかも、この理不尽な暴挙が真面目に取り上げられ、市当局の基本姿勢とされているところに、当局の歪んだ姿勢が浮き彫りになっている。

当局は、市の人口の約半数がいる東舞鶴の町から図書館を無くすことが、文化都市の未来像と考えているのだろうか？。当局は図書館の代わりに分館を充実させると言葉では説明しているつもりかもしれないが、現存する「分館」の実態すら把握しているのかさえも疑たがわしい限りだ。口は重宝なものだ、「嘘も方便」との諺もあるように、口先だけの説明に騙されてはいけない。理屈は後からいくらでも貼れる“貼り薬”のようなもので、効き目のない貼り薬をいくら貼り付けても効果を得ることは出来ない。ちなみに現状の図書館の「別館」とはどの程度のものなのか、おそらく市議会の文教担当の議員先生も知らないのではと思われるほどのレベルであると推測できる。否、承知しているとしたらあまりにも“貧しい認識”という他かない。例えば、ブックコーナーを作れば、それが即図書館「分館」と言いくるめる程度の認識であり、勇気を持って図書室と言うのが精いっぱいなぐらいの代物だ。

とにかく現行の図書館整備計画はあまりにも“ズサン”で“暴挙”と言うほかない。また、東図書館を廃止して分館を作るとしながら、分館をどこに置くかもなかなか決まらず、適当な場所が見つからないので、嫌がる“商工観光センター”と“まなびあむ”の2か所に当局の“力”でねじ込むことにはしたが、これにより当初予定の分館は更に細かく、二つの分館に分かれることとなる。これは当初、当局の図書館整備計画の柱である“統合”して中央図書館を作るとした“統合の法則”の趣旨に反して、分館のそのまた分館を作ると言うことであり、分館を更に“分散”させることである。これでは改革の一貫性が損なわれる制度設計である。このことを認識できない程度の“場当たり”に過ぎない。つまり、一貫性のないご都合主義の「二重思考」である。猪木武徳氏（大阪大学名誉教授）は新聞掲載の「自由と平等」の論考の中で“も「二重思考」は独裁者が生む”旨の指摘があるが、当局のこの“統合”と“分散”の「二重思考」は、教授の指摘と重なる状況だ。つまり当局者は独裁者となっている。今や市行政のなかで怖いものなしに振舞う「ぷくぷくコンビ」（福田豊明氏と福田伸一氏）は、行政府の中を我物顔で振舞うモンスターとなっており、職員に対しては絶対者であり「ぷくぷく帝国」が出現したかのようだ。職員たちも関係する人たちも、氏に逆らうことは許されず、市民が図書館政策について質問しても、どの関係者からもハンコを付いたような回答が戻ってくる味気なさにげんりするのもうなずける。ここまで徹底するには相当のパワハラもあっただろうとの予想はつくが、詳しくは外部の人間には見えない。とにかく当局の「誤った思考が誤った政策」を生み出していることは確かな事実。今や「ぷくぷくコンビ」が「ぷくぷくランド」を築き、行政は「ぷくぷくコンビ」のワンダーランドと化しているかのようだ。